

修士論文(要旨)  
2009年1月

雑誌統制の有無によるコラージュ効果の差  
及びアセスメント指標の検討

指導 中村延江 教授

国際学研究科  
人間科学専攻  
学籍番号 207J5019  
平元彩

# 目次

I 先行研究	1
1. はじめに	1
2. コラージュ療法について	2
3. コラージュの及ぼす心理的効果	12
4. コラージュ作品からのアセスメント指標の探索	18
II 本研究	26
問題	26
目的	29
仮説	29
方法	
1. 予備実験	30
2. 本実験	31
分析Ⅰ：雑誌統制の有無によるコラージュ効果の差の検討	34
結果	
1. POMSについて	34
2. コラージュ効果尺度について	38
3. アンケート結果	39
考察	40
分析Ⅱ：雑誌統制の有無とコラージュ作品のアセスメント	41
結果	
1. コラージュ作品の貼付内容と YG 性格因子の関連	44
2. コラージュ作品の貼付形式と YG 性格因子の関連	47
考察	
1. 雑誌統制の影響について	49
1) 性格特性の群間差	49
2) コラージュ作品内容における雑誌の影響	48
3) コラージュ作品形式における雑誌の影響	50
2. コラージュ作品の貼付内容・形式と YG 性格検査との関連について	51
1) 作品内容と YG 性格検査について	51
2) 作品形式と YG 性格検査について	53
III. 総合考察	55
1. 雑誌統制の影響について	55
2. YG 性格検査とコラージュ作品の関連について	55
IV. 参考・引用文献	57
V. 謝辞	61

## 問題と目的

近年コラージュ療法(以下コラージュ)の研究は多く、コラージュの効果を検討するものやコラージュを性格と比べる研究(佐野 2001, 佐藤 2002 他)や、事例に沿って作品と検討するものなどがある。コラージュ効果を検討する研究では、質問紙を用いた実験(杉浦 1997, 近喰 2000 他)や事例報告がなされ、全体的にコラージュによってポジティブな気分変容が起こることが言われているが、まだそれぞれの研究結果には相違があり、コラージュの効果が明らかではない。また、制作者の特性とコラージュ作品を比べる研究も現時点では同一の結果が出ていない。これらの原因として、刺激となる材料から制作者が受け取るものが違う可能性が考えられる。前述の先行研究を見ると、コラージュの実験では、雑誌や素材の統制は行われたり行われなかったりと実験ごとに違い、臨床的研究では素材統制はほとんど行われていない。コラージュの心理的效果に影響する要因は様々だと思いが、雑誌や素材の影響はどの位受けているのかは現時点では調べられていないと思われる。

これを調べるため本研究では、同一雑誌によるコラージュ制作群(以下雑誌統制群)を用い、比較群として、臨床の現場で多く行われるスタイルである雑誌選択の自由がある群(以下雑誌自由群)を用いることにより、コラージュの心理的效果と、作品に与える影響を調べたいと思う。もしも、この素材の統制がコラージュ効果や作品に影響を及ぼしていなければ、コラージュの基礎研究はより自由な形で行きやすくなり、研究の積み重ねによってコラージュはさらなる発展を遂げられると思われる。本研究では、基礎研究の礎となることを目指し、同一雑誌を用いてのコラージュ制作による気分変容の差を POMS とコラージュ効果尺度(佐藤・鈴木、2000)から検討することを目的 1 とする。さらに、コラージュをアセスメントの方法として使えるかを計るために、出来上がった作品と被験者の矢田部・ギルフォード性格検査(以下 YG)の結果を検討することを、目的 2 とする。

## 仮説

仮説 1: コラージュ制作が及ぼす POMS における気分変容は、雑誌の影響を受けない。

仮説 2: コラージュ効果尺度におけるコラージュ効果は雑誌の影響を受けない。

仮説 3: コラージュ作品の貼付内容・形式は雑誌統制の影響を受けない。

仮説 4: YG 性格検査とコラージュ作品貼付内容との関連は雑誌の影響を受けない。

仮説 5: YG 性格検査とコラージュ作品貼付形式との関連は雑誌の影響を受けない。

## 方法

対象: 大学生, 大学院生, 社会人(雑誌統制群 45 名 平均年齢 22.7±4.21 歳, 雑誌自由群 46 名 平均年齢 20.6±1.69 歳)

実験手続き: 1 グループ 4~5 名で、マガジン・ピクチャー・コラージュ・個人制作法で 1 作品のコラージュ制作を行った。コラージュの前に質問紙①に回答してもらい、コラージュを 30 分かけて制作、その後「テーマ・好きなところ・気になるところ」を聞く振り返りを行い、各自で切片数を「どんなに大きいものも、小さいものも 1 枚とカウントする」との教示で数えてもらった。その後、質問紙②に回答してもらった。実験時間は 1 時間強。

材料: 雑誌 3 冊(雑誌統制群は同一のフリーペーパー 3 冊, 自由雑誌群は被験者が 1 冊雑誌を持参し、残りの 2 冊は実施者側で用意したものの中から、好きなものを選ぶ。) 八つ切り画用紙, 2B 鉛筆, はさみ, 糊。質問紙①(フェイスシート, 日本版 POMS, YG 性格検査) 質問紙②(日本版 POMS, コラージュ効果尺度(鈴木・佐藤 2000), 自由記述アンケート)

## 結果

**コラージュ効果について：**POMS のコラージュ前後の T 得点を算出し、6 感情因子について SPSS16.0 で対応のある 1 要因が独立、1 要因が対応のある分散分析を行った結果、雑誌統制群・雑誌自由群ともに、コラージュ後 T-A, D, F, C は 5%水準で有意に下がり、V は上がった。これらの変化の仕方に群間差はなかった。しかし、A-H は両群ともに下がったが、交互作用が見られ ( $F_{(1,89)}=9.486, p=.003, p < .01$ )、雑誌自由群の方が雑誌統制群より大きく差があった。また、コラージュ効果尺度も平均値を算出し、T 検定を行ったが、両群間に有意差はなく、自己への理解、自己への解放、楽しさと熱中、コミュニケーション促進の 4 因子全てで鈴木・佐藤がコラージュを実施した際に得た結果と同等の得点を得た。

**YG 性格検査とコラージュ作品特徴について：**コラージュ作品の各得点については、内容を人間(絵・写真)・自然・食べ物・動物・乗り物に分類し、形式をはみ出し・画用紙切断・抽象的・同アイテム羅列・文字の使用・重ね貼りの 6 項目に分類し切片数でカウントした。さらに、1 作品につき各項目の切片数を総切片数で割り、それを出現率とし、加えて人間は人数も数え、分析に用いた。作品の貼付内容・形式は群間差があるかを見るため、項目ごとに貼付内容は Mann-Whitney の U 検定を、貼付形式は  $\chi^2$  検定を行った結果、貼付形式ではすべての項目で群間差はなかった。しかし、貼付内容は、”絵の人数”は統制群の方が、”動物数・率”は自由群の方が多く用いたことが分かった。そこで、貼付内容と YG との関連を見るため Spearman の順位相関係数を算出し(表 1)、貼付形式と YG との関連を見るため、出現数が多い 3 項目のみ出現のあり・なしを Mann-Whitney の U 検定にかけた(表 2)。

作品指標	表1. YG性格因子と貼付内容のSpearmanの相関係数				
	D	N	Ag	G	S
食べ物数	<b>-.195+</b>	-.142	.002	.088	<b>.201+</b>
食べ物率	<b>-.197+</b>	-.147	-.008	.071	.184
自然・植物数	.010	-.093	<b>-.214*</b>	-.068	-.134
自然・植物率	.056	-.057	<b>-.251*</b>	-.114	<b>-.186+</b>
人間数	.066	.056	.037	<b>.227*</b>	.093
人数	.017	-.002	.006	<b>.239*</b>	.141
写真人数	-.012	-.018	.031	<b>.236*</b>	.139
動物数	.111	<b>.209*</b>	<b>-.373**</b>	.054	-.066
動物率	.109	<b>.208*</b>	<b>-.368**</b>	.062	-.050

+p<.1, \*p<.05, \*\*p<.01.

作品指標	表2. YG性格因子と貼付形式のMann-WhitneyのU検定				
	D	C	I	N	G
文字の使用	○(u=633.5)	○(u=620.5)	○(u=636)	○(u=642)	○(u=629)
はみ出し	×	×	×	×	×
重ね貼り	×	×	×	×	×

○p<.05, ×n.s.

## 考察

コラージュ効果については、POMS において A-H 以外は雑誌統制・自由群に群間差がなく同様の気分変容を起こす事がわかった。また、コラージュ効果尺度においても、両群間に差はなく同様の気分になる事がわかった。これらは、コラージュによって引き起こされる心理的効果が、雑誌統制の影響を受けないことを意味し、仮説 2 は支持された。仮説 1 は、A-H 以外の感情尺度においては支持された。また、コラージュの作品をアセスメントとして、作品の貼付形式・内容が雑誌の影響を受けるかという点と、作品と YG 性格検査との関連が雑誌の影響を受けるかという点に着目し検討した結果、作品の貼付形式は雑誌統制の影響を受けない事が分かり、仮説 5 は支持された。貼付内容に関しては、少なからず雑誌の影響を受けることが分かり、仮説 3,4 は支持されなかった。これらより、貼付内容に関してアセスメント要素を探索する際には、雑誌の選定および統制が必要であると考えられる。同時に、貼付形式・コラージュの及ぼす心理的効果について探索するのであれば、極端な偏りがなければ雑誌の統制を行う必要なく、検討できるという事も言える。現時点でコラージュの効果や作品のアセスメント指標は明確ではないが、このように素材を選択し、コラージュ研究を発展させることで、これらが確実なものになっていくであろう。

## 引用・参考文献

- 青木智子 2005 コラージュ療法の発展的活用—個人面接,グループワークでの事例を中心として— 風間書房
- 服部令子 1999 対人恐怖症者の表現特徴 (編)森谷寛之・杉浦京子 現代のエスプリ 386 コラージュ療法の実践と独自性 至文堂 p.143~152
- 今村友木子 2001 分裂病者のコラージュ表現—統一素材を用いた量的比較— 名古屋大学大学院教育発達科学研究 第48巻 p.185~195
- 石口貴子・島谷まき子 2006 コラージュ制作体験と気分変容 昭和女子大学生活心理学研究所紀要 p.89~98
- 近喰ふじ子 2000 コラージュ制作が精神・身体に与える影響と効果—日本版 POMSとエゴグラムからの検討— 日本芸術療法学会誌 31巻 第2号 p.66~75
- 宮澤志保 コラージュ制作における表現特徴および行動特徴と性格特性との関連について 心理学研究 第75巻第4号 p.365~370
- 森谷寛之・杉浦京子 1993 コラージュ技法の導入方法 森谷寛之,杉浦京子,入江茂,山中康裕(編) コラージュ療法入門 創元社 p.5~14
- 中島美穂・岡本祐子 2006 コラージュ継続制作における内的体験過程の検討 心理臨床学研究 第24巻 第5号 p.548~557
- 佐野友泰 2001 コラージュ作品に表現されるストレスコーピング・スタイル 神奈川精神医学会誌 第51巻 p.19~24
- 佐藤静 2002 コラージュ制作者の性格特性と作品特性 心理学研究 第73巻第2号 p.192~196
- 園田直子・近藤朗子 2006 コラージュの形式的特徴と自己の関連 久留米大学心理学研究 第5号 p.13~20
- 杉浦京子 1994 コラージュ療法—基礎的研究と実際— 川島書店 p.9~52
- 杉浦京子,鈴木康明,金丸隆太 1997 集団コラージュ制作の効果—社会心理学的,臨床心理学的考察—日医大基礎科学紀要 第23号
- 鈴木由実・佐藤いづみ 2000 大学生の授業内コラージュ作成が及ぼす心理的効果の研究 聖徳大学研究紀要 第33号 p.57~62
- 矢幡久美子 2003 コラージュの中の文字表現 居場所探しのテーマ 心理臨床学研究 第21巻 第5号 p.450~461
- 山崎暁・石井雄吉 2002 素材統制を行ったコラージュ作品に見られる性格タイプについて—印象の観点から— 神奈川精神医学会誌 第52巻 p.35~41